

震災復興の方向性（造園学会東北支部第1回幹事会でのディスカッション）

（平成23年5月13日 仙台アエルにて）

●海岸部の植生、今後の復旧

宮城県山本町には一部常緑樹が残っている。もともと沿岸部は松林ではなく常緑広葉樹（スダジイ等）が沿岸を守っていた。松林の復元という方向性でいいのか。福島内陸部は建築被害が大きい。これに対する復興支援も必要。海岸線は背が低い松が倒伏して残っている。背が高い松が倒れた。今後の参考になる。

●復旧復興の進め方、学会の関わり方

NPOや住民から復興の動きをつくれぬか。単に住民の意向を反映するというトップダウンではなく。地域の専門家が活躍することや基礎自治体単位でやるなどもそのイメージ。

「冒険広場」の根本さんは現場にいて助かった。マウンドを横につなげて農地を守るというアイデアもある。冒険広場の復活にとどまらず海岸の復活をどうするかをこの期に考えてはどうか。大学が活躍すべき。学会が支援して市民と大学や学生を繋いでどうか。

●震災後の「子供遊び場」のあり方

根元（NPO 法人冒険遊び場—せんだい・みやぎネットワーク）

冒険広場をどうやって復活するか。冒険広場の役割は「子供が思いっきり遊べる場所を提供すること」で、これからもかわらない。それに加えて被災の記憶（記録）を残したい（教訓）。

隣接地が瓦礫の仮置き場になっている。今後も増えそうだ。海岸公園全体がこれからどうなるかをちゃんと想定しておきたい。森の再生（植樹）なども考えられる。

子供の遊び環境づくりをどうするか。今すぐ公園で活動できないが周りで何かできないか。学校の校庭や他の公園で遊びができなかに調べている。若林地区の公園は仮設住宅などに使われている。こういうときだからこそ子供の心のケアが必要。そここのところでは何かできるかを考えたい。また、被災していない公園をどう使えるかということでもある。

今、公園の指定管理者が何ができるかという視点もある。今年業務があるかどうか不明な状況だが、指定管理者が運営している公園は沢山ある。管理者にどう動いてもらうかの想定はあってよい。休んでいるのはもったいない。

高橋（NPO 法人冒険遊び場—せんだい・みやぎネットワーク）

被災が大きく復旧が遅れている。大人はみんな焦っている。親が活動しなければならぬ状況で子供が孤立しつつある（ケアが必要）。子供のことを考えるとこれからが勝負。

いろいろな人が公園で遊んでいるが仮設住宅がどんどん建っている。仮設住宅の入った家族が公園を使うことになる。公園という場をつくるだけじゃなく、「遊び場」という環境を様々な被災者のそばで作ってゆく必要がある。

公園には顔がある。どこでも同じことがやれる訳じゃない。場所を読む必要がある（公園の使い方を考える）。

公園も津波に飲まれ傷ついている（ケアしたい）。残された「冒険広場」自体が生き残った人の支えになるのではないか。

海岸公園「冒険広場」はファンが多い。この場所を通じた市民のネットワークもある。オープン当時は辺鄙な場所のイメージがあったが、今では全国にファンがおり、残ったことに希望を持っている人が沢山いる。「冒険広場」の状態を知りたがっている人が沢山いる。

「冒険広場」はもともと池があった場所なので古い人は避難地としてみなしていなかったが、井戸の集落の方が「冒険広場」に避難してきた。

●津波で残った場所の意味

「冒険広場は」海を見る滑り台を造りたくて造った丘である。6年前は突然できた丘に違和感があったと思う。しかし今回津波で残ったことで価値観が変わっていると思う。

三陸の人は地元に残りたいと言っている人が多いが、宮城の人は残りたくないと言っている人が多い。宮城の人にとって残った「冒険広場」はこれからその土地に残る場合の拠り所になるのではないか。

井戸の集落とのネットワーク、利用者とのネットワークがある。今だからこそあの場所で何か活動することがとても大きな意味を生むのではないか（公園の意味、場所に対してどういう思いを込めるか）。

●復旧復興における空間の質のあり方

記憶を紡ぐランドスケープ形成が必要。復興を急ぐほど機械的な場ができるのではないか。環境学習ができるような里山環境の形成が必要ではないか。生物多様性、ビオトープなどが復興のイメージの中では弱い（ちゃんと入れるべき）。

この期に水路の復元などでは生態系を豊かにするような復旧が望ましい。貞山堀の所に橋があるといろいろな拠点になるのではないか。

●復旧復興の進め方、学会の関わり方

都市計画で最近議論されている縮減が復旧・復興のテーマにもなる。

仙台市は1万人程度の集団移転を想定している（東部道路より東側）。住民の多くもそれを望んでいる。しかし1割の残りたい人の意向も無視できない。

岩手県などの復興は小さい町単位だからボトムアップ式の町づくりがよい。仙台平野は大きいから別のやり方が必要か。閑上などは残りたい人が多い。そういうところは被災地でも人が残るだろう。

小さい自治体は早くマスタープランを示すべき。それを参考に復興のあり方を地域で考えることになるだろう。ワークショップ型の町づくりでは大学や学生多く活躍できるのではないのか。

今後の学会の提案タイミングとして、これからできるマスタープランに対して評価や意見をいうことができるのではないか。

学会員であるが学会内部において何をこれからとしているか分からない（情報が入らない）。会員に情報が足りないことは社会に対してもアピールが足りないのと同じ。原風景がなくなった場所がある。復元ではない。原風景になるような風景を新たにつくるべきではないか。

場所ごとに状況が違う。その違う状況に対してどう関わってゆけるかどうかとうこと自体がテーマになっている。